

「ハーランズ・レース」

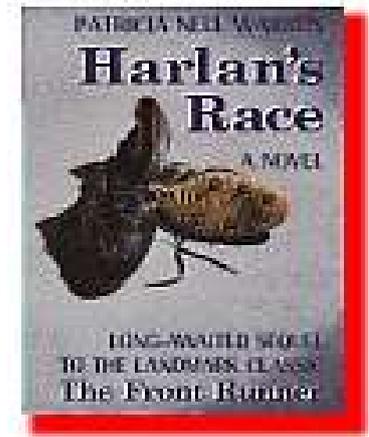
パトリア・ネル・ウォーレン 訳 北丸雄二訳

紹介者 榎本博康

[紹介]

ハーランはゲイのランニング・コーチである。3人のゲイ・ランナーの一人、シーヴは彼と結婚し、1976年モンリオール五輪で五千メートルと一万メートルを快走するが、テロの銃撃に倒れた。(前作「フロントランナー」)

銃殺犯の裁判が行われたが、第二の犯人から脅迫状が来る。ハーランは作家でゲイのスティーブの家に身を隠し、ハマグリ採りをして季節を過ごす。脅迫は続き、友人のベトナム帰りのボディガードに来てもらう。自分探しの時が続く。ハーランは大学を辞め、ライターの道を歩む。スティーブは奇妙な病気で死に、ハーランが彼の仕事を継ぐ。3人のランナーのひとり、ヴィンスは過激な行動に身を置こうとしたが、帰ってきた。シーヴが殺された翌年から、ロスアンジェルズで「ビリー・シーヴ・メモリアル5K(ファイブケー)」が開かれており、第5回の1981年はハーランも参加することにする。そして謎の脅迫者が銃撃に及ぼうとするが。



ハーランズ・レースの表紙

(発行June 1st 1996) 初版は1994年、デザインはシーヴが最後に履いていた靴

[感想]

さて2000年(初稿執筆時点)だ。年賀状に迎春と書く人もいる。でも今回はゲイ春だ。

前作、フロント・ランナーは1974年に発売され、発表当時は近未来である1976年のカナダ、モンリオールオリンピックでのゲイ・ランナー、シーヴの一万メートルでの快走と、テロによる死を描いてベストセラーになった。(走り読み文学探訪その10を参照)

すると、さっそくその1974年にサンフランシスコでフロント・ランナー・クラブが組織された。その後続々と同名のクラブが組織され、現在では全世界に100近くあると言われている。アメリカをはじめとして、カナダ、イギリス、フランス、ドイツ、ノルウェー、アイルランド、ウクライナ、南アフリカ、オーストラリア、ニュージーランドなどだ。

フロント・ランナー・クラブはレズビアン、ゲイと彼らの理解者によるランニングクラブである。フロント・ランナーという名前からは速そうだが、もちろん健康ランニングが多い。毎週の練習日に集まり、またレースを開催して、後は近くのレストランで昼食をとりながら情報交換するのが、一般的な活動だ。この小説に出てくるロスアンジェルズのクラブは実在する。

中でもニューヨークは最も活動的なようだ。ニューヨーク・フロント・ランナー・クラブの主催する「レズビアンとゲイの人権主張ラン(Pride Run)」は、彼らの友好組織であり、世界最大のランニング組織である、ニューヨーク・ロード・ランナーズ・クラブ(NYRRC、1958年創立、会員数32,000名)のランニング・サーキットの一つでもある。また有名なNYRRC主催のニューヨーク・シティマラソンの24マイル(約38キロ)地点に彼らのエードステーションがあるという。ゲイのシンボルカラーは六色の虹色(上から赤、橙、黄、緑、青、紫)なので、それで見分けがつくかも知れない。ニューヨークシティマラソンに出場するなら、こういう所も押さえて

おこう。

ゲイであることを隠すことを、押し入れ(クローゼット)に隠れると言う。そしてそれを世間に公表することをカミングアウトと言う。フロント・ランナー・クラブで走ることでカミングアウトすることができる。ランニングには、こういう役割もあるのだ。こういうこともできるのだ。ランニングの可能性に眼が開く思いだ。

ゲイは体質のひとつに過ぎない。しかしマイノリティ(少数者)として迫害される。親兄弟からも疎んぜられ、非常な精神的苦痛を受ける。だから隠すが、隠して生きることは精神的に苦痛である。それをフロント・ランナー・クラブで、仲間を得、場合によっては精神的なケアも受けて、そしてカミングアウトする。多くの人が押し入れから出てくることで、彼らの人権運動は前進して行く。

さて前作のフロント・ランナーはゲイの純愛物語だったが、ハーランズ・レースの時代ではそうは行かない。1978年から1981年を中心とした話の中で、不思議な病気で死ぬゲイ達がいる。時間的に後の方のシーンでは、それがエイズだと認識されている。彼らの人権運動の行き詰まり、奇妙な病気の恐怖、そして謎の脅迫者という、重苦しい設定である。大統領で言えば、ジミー・カーターから、ドナルド・リーガンの頃、ベトナム戦争の後遺症による、アメリカの自信の喪失、双子の赤字(財政赤字と貿易赤字)が深刻であった頃だ。

本作では、誰もなかなか走らない。ハーランもヴィンスも走らない。そんな中で、ハーランの息子、マイクルが走り始める。ハーランは妻からひどく憎まれており、マイクルはハーランに会うことを禁じられていた。しかし彼は父を理解したいと思い、自らハーランにコンタクトをした。マイクルはストレート(異性愛者)で、婚約者がいる。そしてメモリアル5Kで2位に入る。一緒に走ることで理解者であることを明確にしたのだ。一時は自己を失ったかに見えたヴィンスも走りを取り戻し、3位に入る。いつ狙撃されるか分からない緊張の中でのレースだったが、走ることはテロに屈しない気持ちであり、怒りである。共生、再生、闘争、人権主張。そのような心を込めて、本書の最後で走った。

(初稿2000. 1. 10)

[リバイバル感想]

AIDSは1983年にパスツール研究所で患者から発見され、日本では1985年に最初の確認があったという。とすると本書の時代(～1981年)にAIDSとの認識があったというのは史実と齟齬するが、不思議な病気という不安がゲイの世界に漂っていたことはあっただろう。

最近では新型コロナ禍の渦中であり、それが無くともAIDSのことを報道で聞くことが稀になった。初稿を書いた2000年頃は日本でもその患者数が増え続けている状態であり、また1980年代の薬害AIDSの記憶が未だ生々しく、刑事裁判も進行中であった。今思うとAIDSという一種の嵐が吹き続いていた時代だった。今厚労省のサイトを確認すると、2007年頃から毎年の患者数が上げ止まっているようである。つまり減っていない。世界的に見れば日本は少ないが、安心できない状態が続いている。話題になっていないだけだ。また治療法が開発されて感染後の余命が非感染者並みになってきているとの情報もあるが、発見の遅れなどで、そうでも無い場合もあるようだ。

そしてLGBTだ。1990年代からこの用語が使われ始めたようだが、最近では頻繁に耳にするようになり、日経電子版で検索すると2020年に136件の記事が確認できた。バイデン米国大統領の就任初日大統領令(2021年1月20日)に、「職場でのLGBT(性的少数者)差別を禁じる法律を徹底するよう求める」という項目がある。(所で前記のカッコ内は日経によるものと思われるが、

法務省のサイトでは性的少数者 (sexual minority) の方が大きい概念で、LGBTはそこに内包されるようである。ちなみにAIDSの記事は2020年にゼロだった。)

本題に戻る。走ることがなぜ人権運動に結び付くのか。この答えは既に見てきた金子みすゞ(22話)と樋口一葉(23話)の認識にあったと思う。つまり走るとは人間性の開放に他ならないという認識だ。まずそこで一致し、お互いを認識しあい、そして共に進もうという呼びかけだ。私はそう思う。

(2021. 1. 23)